

もう一つの林海音像
—日本に関する描写にみられる意味—

天 神 裕 子*

Another side of Lin-HaiYin
—Identity as a writer from mainland in post-war Taiwan—

TENJIN Yuko

Abstract

Lin-Haiyin is a writer who was born in Osaka, grew up in Beijing, and worked in postwar Taiwan.

She wrote many essays and novels about Beijing where she passed half a lifetime. For example, her masterpiece “My Memorize in Old Beijing” (1960) had filmed Mainland China(1982), and the image for nostalgic old Beijing was strongly impressed the audience.

Many people talked about her description for Beijing, and there are few precedent studies about the description for Taiwan.

How did she describe about her birthplace Japan? This paper focuses on Lin Hai-yin's depiction about Japan, and examines the meaning of it.

Keywords: Lin-HaiYin, describe about Japan, the 1950s

はじめに

本稿は、作家林海音の日本に関する描写について、その意味を明らかにしようとするものである。林海音、本名林含音（1918－2001）は、日本の大阪に生まれ、民国期の北京に育ち、戦後の台湾文壇で活動した女性作家である。台湾籍の両親を持つ林海音が、日本そして北京で暮らすことになったのは、父の林煥文¹が日本の植民地下にあった台湾を脱出し、外へ新天地を求めたためであった。煥文は日本統治下の教育を受けて公学校²の教師などをしていたが、1917年、年若い妻愛珍を連れて日本へ渡り、大阪で商売を始め、そこで林海音が誕生した。商売は思わしくなく一家は一旦台湾へ引き上げるが、林海音が5歳のときに再び北京へ移り住み、以降林海音は25年間を北京の城南で暮らすことになる。林海音の本格的な作家活動は1948年に台湾へ渡ってからであったが、半生を暮した北京に関する作品が少なくない。そのうち、少女時代の思い出をもとに書いたという小説『城南旧事』（1960年）³は、林海音の代表作としてよく知られる。まだ城壁の残る、ラクダや水売りの行きかう北京の胡同を舞台にした本作品は、中国大陆では1982年に映画化され、とくにその郷愁のイメージで人気を博した。⁴映画では、小説中の主人公の英子一家が台湾人であることを匂わせるくだりがすべて省かれ、古き良き北京のイメージが強調されたため、林海音＝北京という構図が印象付けられた。映画は日本でも上映され、同様の作家像が定着した。小説と映画の描写の相違点や映画制作の背景などについては、日本語版の翻訳者でもある杉野元子氏、また應鳳凰氏の論文に詳しい。⁵一方台湾文壇では、林海音は一作家としてのみならず、編集者、出版人として多くの作家を育て、戦後の台湾文壇の発展を担った一人として、夫何凡（夏承楹）⁶とともに高く評価され

キーワード：林海音、日本に関する描写、1950年代

*平成23年度生 比較社会文化学専攻

ている。⁷ 創作については、昨今北京の郷愁とは別の林海音像も注目され始め、例えば王鈺婷は「林海音の特殊な台湾籍の身分が、複雑な二重の主体の位置を形成した」⁸と述べ、同時期に台湾へ渡った大陸出身作家らとは異なる“半山”の視点が、林海音の作品中に反映されていると指摘した。林海音の次女で作家の夏祖麗も「1949～1952年の間に書かれた文章の多くが台湾の郷土風物を大陸出身者に紹介する文章だった」⁹と述べている。確かに当時の新聞の文芸欄などに発表された文章を読むと、女性や家庭に関する散文のほか、台湾の民俗や風物を紹介した一連の文章がみられ、その出現は北京に関する文章が頻出するよりも早い時期であった。それら台湾に関する散文について、筆者も散文集『兩地』（1966年）を取り上げ、“北京”だけでない林海音の一面について考察した。¹⁰ 北京そして台湾という二つの土地は林海音にとってかけがえのない存在であり、林自身もまた『兩地』序において「台湾は私の故郷、北京は私が育った場所。私は生涯この二つの地を離れられない」¹¹と述べている。

では、生誕地の日本に関し、林海音はどのような描写をしていたのか。管見の限りにおいてこの点についてはまだ分析がほとんどなく、林自身によってもとりたてて語られてこなかった。しかし、台湾の民俗に関する文章を多数発表していたのと同じ時期、林海音は『中央日報』『中央週刊』¹²や『国語日報』¹³「週末」版などの紙面で、日本に関する文章をしばしば発表していたのである。北京や台湾とは別の意味で人生に深くかかわった日本について、林海音はどのように描き、その描写はどのような意味を持っていたのか。それを探ることは、台湾という“故郷”を持ち、北京で育った林海音という作家の、日本に対する複雑な思いを知り、戦後台湾文学の持つ多様性の一端を明らかにするうえで意味があると思われる。本稿では林海音の日本に関する文章をテキストとして、おもに1950年代前後の日本に関する描写を分析し、その描写の意味について考察を試みる。

1. 日本に関する文章（1950年代～1990年代）

ここに、林海音の日本に関する作品を現在わかっている限り列挙する。¹⁴

	タイトル	形式	掲載メディア／年号	初出年/月/日
A	1 日本の白面児房	散文	『国語日報』 周末版（初出）	1949/ 3 / 4
	2 日本房子与其他	散文	『中央日報』 第6面（初出）	1949/ 7 /14
	3 国語家庭※	散文	『国語日報』 週末版（初出）	1950/ 4 /22
	4 艋舺	散文	『国語日報』 週末版（初出）	1950/12/23
	5 扈叔※	散文	『国語日報』 週末版（初出）	1950/12/ 9
	6 光復以来※	散文	『中央日報』 中央週刊（初出）	1950/10/25
	7 英子の郷恋※	散文	『台湾文芸』 第一巻第一期（初出？）	1951/ 3 月
	8 勿忘婦女読者※	散文	『中央日報』（初出）	1951/ 5 / 9
	9 霧社英魂祭	散文	『海燕集』 海燕出版（1953）	1951/11/20
	10 白兔跳※	小説	『聯合報』 副刊	1954/10/11
B	11 絹笠町憶往※	散文	『寫在風中』 遊目族出版（2000）	1965年
	12 林芙美子和『放浪記』	散文	『春風已遠』 遊目族出版（2000）	1985年
	13 我的京味児回憶録	散文	『我的京味児回憶録』 遊目族出版（2000）	1987年
	14 記日本関西之旅	散文	『写在風中』 遊目族出版（2000）	（1994年？）
	15 英子对英子	散文	『写在風中』 遊目族出版（2000）	1995年

※印は本稿で取り上げる文章である。その他の作品について簡単に触れておくと、1は日本が中国を侵略した時期、北京に多数設置されていた白面児（ヒロイン）の販売所について批判。2はマイクロフィルムの文字が不鮮明で判別が困難だが、抗日戦争時期について書かれている。4は台北の繁華街艋舺について紹介した文章であるが、この中で、日本は50年間台湾を占領し、地名“艋舺”を“萬華”と改めたが、台湾人はこの日本名を好まず常に艋舺と呼んできたと指摘している。9は植民地時代の二大抗日事件の一つ霧社事件についてで、副題に「迫害に甘んじない民族の血と涙の物語」とあり、理不尽な侵略に屈しない台湾原住民の誇りを称える。一方12は、1930年代に『世界日報』の女性記者として、北京を訪れた林芙美子を取材したことが書かれる。貧困と屈辱のも

とに生まれながらその環境に屈せず生きている女性として、林芙美子の姿勢に大きな感銘を受けたと綴られている。13は、林が幼いころ日本の文化に親しみ、日本の手回し式蓄音機や童謡のレコードが家にあったことが記されている。14は1994年、林海音が日本老舎研究会の招聘によって、関西大学で『城南旧事』の中の北京」と題する講演のために来日した際の日記風散文である。誰と会いどこへ行ったかなどが詳細に記され、日本の研究者への深い尊敬と関心、交流の喜びが窺える。15は14の関西訪問後に東京へ赴きお茶の水女子大学で講演し、映画『城南旧事』の英子役を演じた女優沈潔と会ったことが書かれている。日本に関する文章は1950年前後に頻出し、その後は1965年、1980年代～90年代に飛んでいる。いずれも散文であるが、これらの文章は大きく二つに分けられよう。比較的初期に書かれた1～10までの文章（A群とする）には、日本に対し批判的な描写が多く、11～15（B群とする）には、親しみや懐かしさの描写がみられる。さらに表中A群の文章が、1950年代頃までの比較的限定された時期に集中していたことがわかる。本稿ではおもにこれらA群の文章について、日本に関する描写の意味を分析していきたい。

2. 日本に関する描写～A群の文章

2-1. 仇として描かれた日本

A群のなかでも最も感情的に描かれているのは、日中戦争時期に病死した父林煥文と叔父林炳文に関する文章である。日本統治下の台湾で日本語教育を受けつつも、占領下の社会を嫌って故郷から脱出した父は、北京の台湾人コミュニティ¹⁵の中心的人物であったという。亭主関白で躰には厳しいが愛情深い父、優しく穏やかな母、沢山の兄弟や同郷人に囲まれていた頃の北京での暮らしが、幼き日の林海音にとっていかに大切なものであったかは想像に難くない。しかし、やがて日本の中国侵略が顕著となり、父の末の弟林炳文が日本人に捉えられて獄死する。以下「尅叔」にはその事件が記される。（以下、日本語訳は筆者による）

後に末の叔父は朝鮮の抗日分子と付き合い、何かことを起こそうとしたとき、運悪く大連で日本人に捕えられ、監獄で毒を飲まされ死んでしまった。叔父の写真が日本の新聞に載ったとき、父は悲しみのあまり声も出なかった。（中略）父は叔父の亡きがらを大連へ引き取りに行き、しばらくすると度々血を吐くようになったのだ。当時祖父は手紙でこの件について父を責めた。—「尅叔」 1950年12月9日、『国語日報』週末版

父の心労は病気を悪化させ、満州事変が勃発した1931年、か弱い母愛珍と林海音以下7人の子どもたちを残して他界する。さらに、当時の出来事について林海音自身が「これらの手紙はすべて本当に書いたものとは限らないが、当時の私の本当の心情と真実の生活状況である」¹⁶と述べる「英子的郷恋」には、父を奪い故郷を奪った日本に対する怒りが露わに記される。これは台湾の祖父や従兄との五通の手紙で構成される散文で、以下の第二信には、台湾へ戻るよう勧める祖父に、敢えて戻らない決意を表明する描写がある。

私たちは勉強をやめたくないですが、途中から日本の学校へ編入したくはありません。それに、叔父さんが大連の監獄で日本人に殺されてからというもの、大好きな叔父さんを死に追いやったあの国に対する憎しみを、私は永遠に忘れることができません。また父の病も、大連へ叔父さんの遺体を取りに行ってから悪化したのです。—「英子的郷恋」1951年3月、『台湾文芸』第一巻第一期

この手紙が実際に祖父や従兄に送られたものなのかについては別にして、林海音はこの散文について「自分のすべての感情をこめて書いたので、特別に大切な文章」¹⁷と述べている。今回A群とした作品のなかで、後に出版された全集や選集にもかなりの頻度で掲載されている作品であり、同タイトル名の著書も出ていることから、この文章が林海音にとって重要な位置にあったことが窺える。¹⁸この散文には、北京でも余所者であった自分たち台湾人の立場とともに、故郷への強い思慕が描かれるが、散文中の「私」は、父の仇である日本の植民地に戻らず、みずから手で故郷を封印している。この常に纏わる一種の疎外感にこそ、林海音のアイデンティティの根本的問題が存在すると言えるだろう。日中戦争時期のこうした心情を、1950年代にふたたび発表した意図につ

いて考えると、日本語や日本文化を払拭し中国語と中国文化の伝播を提唱していた国民党政府の政策との関係性が見え隠れする。日本統治に慣れきった台湾の人々に対し、日本とのあるべき関係性（＝仇の関係）を認識させようという意図も働いていたのではないか。

2-2. 余所者からの復帰

次の文章には、台湾が植民地となっていたがゆえの、北京で余所者として暮らさなければならなかったジレンマが描かれる。

私は決して忘れはしない、故郷のためにかつて受けてきた打撃のすべてを。あるとき小さな集まりがあり、皆が日本の問題について憤慨して話していた（当時はまさに日本人の統治下であった）。一人の友人がふざけて私に言った、「君は日本人だからきっと喜んでいるんだろう！」その時私の顔は真っ赤になり、心は怒りではちきれそうになった。しかし私は彼にこう答えた。「今日あなたが言った言葉を、私は絶対に忘れないわ。」 — 「光復以来」 1950年10月25日、中央日報「中央週刊」光復節記念特集号

幼いころから北京っ子として育った林海音にとって、「日本人だから」という冗談は侮辱以外の何物でもなかった。実際、林の父世代の台湾人たちは、日本当局の目を逃れるために自らを台湾人でなく“番薯人”（台湾がサツマイモに似ていることから）と称し、北京の人間になりきれない境遇のなかで暮らしていた。幼少のころから北京で育った林海音であっても、時としてこうした疎外感を思い知らされたはずである。光復とは「植民地支配からの解放」を意味する。1945年、日本の無条件降伏とともに50年間続いた台湾の植民地時代は終結した。連合軍の協定により、台湾および澎湖は「中国戦区最高総帥蒋介石將軍」による接收が決定した。これに先駆けて国民党軍と台湾行政長官に任命された陳儀が台湾に到着し、台湾の人々は熱烈な歓迎をもって祖国の軍隊を迎えた。そののち二・二八事件¹⁹、白色テロ²⁰という歴史のなかで、人々は長い間抑圧と沈黙をふたたび強いられることになる。ただ、林海音にとって「台湾光復」は心から喜ばしいことであった。台湾は日本の支配下から解放され本来の姿を取り戻す。今こそ正当な中国文化と言語を台湾の人々に伝えねばならない。林自身もまた、余所者の枷をつけられた北京の台湾人、植民地人として抑圧される台湾人という、いずれの疎外感からも解放された。北京で育ち北京語が堪能で（＝文化的正当性）かつ台湾籍（＝血統的正当性）を有する彼女は、台湾文壇再生の担い手として他の誰よりもふさわしい存在となった。林のアイデンティティと故郷の立ち位置はこのようにして矛盾なく重なったのである。

2-3. 日本時代への批判

林海音は、日本の植民地政策を批判する文章もしばしば発表した。A群のなかにもいくつかみられ、このうち「国語家族」は日本の言語政策について書かれた文章である。

私の親戚の青年は台湾語を話す、私と同じようにぎこちなく奇妙な発音だった。あとで隣人の奥さんに聞いたのだが、戦前、かれらは完全に日本語を使うのを強いられてきた。家の中でも外でも、日本語だけで話さなければならなかった。そのため青年たちは台湾語が話せなくなってしまったのだ。光復後、日本語を捨てて国語【訳注：中国語】を勉強し始めたが、話してみるとぎこちなく、日本語を挟まないとほとんど通じない。——日本人は別の言語を新たに教えるのではなく、もともとの言語を忘れさせたのだ。中国の言語は元来複雑なため、政府【訳注：国民党政府】は国語を統一したが、人々に故郷の言葉を話すのを禁じたりはしなかった。この点において、侵略者のやり方というのはやはり違うのだということがわかる。

— 「国語家庭」 1950年4月22日、『国語日報』週末版

日本は1937年、戦争への動員の必要から台湾で皇民化運動²¹を開始した。台湾人に対し日本式の姓名への改称や、日本語を話すこと、神道の信仰などを積極的に求め、日本語レベルの高い家庭を“国語家庭”として奨励した。²²さらにこの時期、日本総督府はメディアでの漢語の使用を禁止し、また学校で台湾語を使用した生徒には

体罰を加えるなどした。戦後、台湾では国民党政府による新たな言語政策が推進され、林海音の夫何凡も「台湾省国語推行委員会」のメンバーの一人となり、夫婦ともに『国語日報』の編集を務めた。林海音はいわば国語推進運動の最前線にいた。戦後の台湾で蒋介石政権がとった国語（中国語）推進政策は強圧的なもので、台湾語の使用は禁止された。林海音がこの文章を発表したのは1951年に政府が方言の使用を禁ずる直前であるが、本文中では方言の使用に寛容であった大陸時代の国民党政府の言語政策を、総督府の強圧的な政策と対比させており、当時の当局とは異なる林独自の視点が表れているように思われる。²³

2-4. 台湾に対する使命感

林海音が大量に散文を発表した1950年代は、国民党政府による全面的な文芸政策が推進された。台湾を接収した蒋介石は、言語政策として国語推進運動を行ったほか、言論の自由を制限し、また「反共抗ソ」を掲げた文学を奨励した。²⁴葉石涛はその著書のなかで、1950年代から1960年代までの10年間、台湾文学は来台した作家の完全支配下に置かれ、国を追われた失意と憎悪によって生み出される彼らの文学は台湾の民衆とはかけ離れたものであったと指摘する。²⁵葉はまた当時の文壇の特徴の一つとして「1950年代は女流作家が輩出した時代」²⁶だと述べ、大陸から渡って来た多数の女性作家が、言語的優位性をもって一気に文壇に出てきたことを指摘している。それらの作家は、中国大陆で五四文化運動を経験した、新聞記者や教師出身などの知識人女性であったが、日中戦争と内戦の混乱を逃れ、台湾に渡った後ふたたび執筆活動を開始した。彼女たちにとってみれば、子どもを抱え、新たな土地で、目の前の生活を成り立たせることが問題であった。そしてこうした彼女たちの登場は、北京語の堪能な人材が求められていた時代のニーズにぴたりと当てはまったと言える。

林海音もこうした女性作家の一人であった。彼女は日々の糧を得るため、そして自らの執筆意欲に突き動かされ、新聞各紙に精力的に投稿を始める。『国語日報』の主編時代には、原稿料も出せないため自ら執筆も手がけた。『聯合報』副刊の主編時代には、本省人若手作家が作品中で使った台湾方言を要望通りに掲載したり、日本語世代の作家たちの中国語をみずから添削したりと、多くの作家を助け文壇に送り出した。日本人化された故郷の人々への同情、台湾の文化を外省人に伝えるという使命感、旧態依然とした養女制度に苦しめられる台湾の女性に対する啓蒙など、戦後の台湾で林海音の果たそうとした役割は多様であった。次に挙げる文章にもこうした使命感が表れている。『中央日報』「婦女與家庭」欄で「婦女と文学—女性作家空中座談会」と題した女性作家の座談会が特集で組まれたときのもので、このコラムに常時文章を掲載している5人の女性作家がコメントを寄せている。このなかで林海音は、日本書籍の大量輸入という現象に反対したうえで、次のように主張した。

私は一人の台湾人としてまた国語推進を行う立場として、当然こうした現象に反対する。なぜならそれは台湾の同胞が祖国の文字を学習する一大障害となるからであり、われわれは絶対にこれに反対せねばならない。しかし日本の書籍を禁止した後それに変えて何を精神の糧となすべきか！——台湾女性の教育がどれだけ普及しているかは周知のことで、彼女たちは読書力があり読書する楽しみを知っている。彼女たちはとくに婦人向けの読みものを好む。そうした読みものは精神の糧を得られるだけでなく、生活の技術や常識を学ぶこともできるからだ。それで日本の「婦人之友」「婦人倶楽部」などの婦人雑誌が人気なのである。正直に言えば、これらの理由は日本だからというのではなく、いかなる進歩的な国でも、女性たちはすべからず重要視されている——台湾の女性にも、祖国のことをもっとよく理解でき、より親しみやすい、完全な婦人雑誌をつくるのが重要な仕事なのだ。——「勿忘婦女読者」1951年5月9日、『中央日報』

この文章からは、林海音の国語推進者としての使命感に加えて、女性読者への関心、同時に日本の雑誌にも質の高いものがあることを認める視点がみられる。実際、林海音が主編を務めた『国語日報』には、日本の婦人雑誌の文章も翻訳、掲載されていた。²⁷さらに、短編小説「白兔跳」にも台湾の女性に対するある種の使命感が垣間見られる。「白兔跳」とは教師が生徒に課す「免跳び」のことであり、主人公「我」と、家に遊びに来た嫂と姪との会話にこの言葉は謎解きのように登場する。「我」はその意味が分からず、姪に尋ねるうちに『『日本時代』の遺した毒』の体罰であったことが分かるのだが、注目したいのは「我」の「日本時代」に対する独白部分である。

「日本時代」と言うと思う浮かぶのは、この四文字が私と嫂の間にある種の溝をつくることだ。嫂は高等女学校を卒業したが、光復のとき、母語の台湾語すらおぼつかなくなっていた。一中略—そんなとき彼女は決まって「『日本時代』はこんなじゃなかったのに！」とまるで「日本時代」の様々な良い点が彼女の誇りであるかのように言う。私はといえば、まるで光復後の様々な欠点が私自身の恥辱でもあるかのように、いつも現在の欠点を覆い隠したくなる。だから私は早くからもう決心していたのだ、いつか嫂の「日本時代」を徹底的に打ち壊そうと！—「白兔跳」1954年10月11日、『聯合報』副刊

A群の中では比較的后半に書かれており、小説のスタイルで間接的に表現されているものの、日本時代を経験した嫂への同情と、日本統治を懐かしむ嫂に対する忸怩たる思いが看取できる。

3. 日本に関する描写～B群の文章

3-1. 語られはじめた日本との繋がり

一方、B群の文章にはA群のような批判はみられなくなり、親日的な描写が現れる。B群のうち11は1965年、12～15までは1980年代以降に書かれたものである。1980年代とは、中国大陆で文化大革命時代の混乱が徐々に沈静化し、低迷していた思想界、文学界にも新しい息吹が吹き込まれつつあった時期であり、林海音にとっても、『城南旧事』の映画化によって、兩岸の文壇の橋梁としても活躍していく時期であった。14、15にもみられるように日本の研究者とも積極的に交流しており、人間への関心が強く、フレンドリーで積極的な林海音の人柄が日本でも発揮されていたことが窺える。本稿では紙幅の都合上、発表された時期がA群と比較的近い11についてのみ取りあげたい。1965年の作で、同年林海音が40数年ぶりに生誕地の大阪を訪れたことを記した文章である。林海音は10年間務めた『聯合報』の主編を辞職し、米国国務院の「認識美国」プロジェクトの女性第一号として4か月間の訪米を終えた帰途に日本を訪ねた。以下は、自分がその病院で生まれたことを病院の職員に告げたあと、さらに古株の看護婦を呼んで当時の様子を尋ねようとしているくだりである。

私は彼[訳注：病院の職員]に、自分はこの病院で生まれた中国人で、四十年たった今初めてこの出生地を訪ねてきたのだと告げた。また、私が生まれたときの最初の言葉は日本語だったが、惜しいことに今はすっかり忘れてしまった、とも言った。一中略—結局、彼女[訳注：古株の看護婦]がこの病院へ来たのは私が生まれた四、五年あとだったのだ！こうしてみると、この病院におけるキャリアで言えば彼女より私の方が先輩だったということになる。わたしたちはみなで大笑いしてしまった。

—「絹笠町憶往」『写在風中』2000年

1965年の林海音には、すでに日本を生まれ故郷として受け入れる余裕があったのだろうか。日本生まれで、日本の植民地である台湾の人間であったがゆえに、北京在住の時代、日本人と侮辱された悔しさは消えたのか。林海音にとって、大陸や台湾を侵略した日本が許しがたい存在であったのは相違ない。しかし一方で、長い間根なし草（故郷台湾から遠く離れ、北京でも疎外感をぬぐえない）の苦痛を味わってきた林海音にとって、最愛の両親が初めて生活をともにし、自分を生んだ日本という地もまた、自らのルーツを探すうえで欠かせない存在だったのでなかろうか。さらにこの時期、蒋介石政権を暗に批判したとみなされた一編の読者の詩を聯合報に掲載したことで、10年間務めた『聯合報』副刊の主編の職をなかば責任を取る形で辞職した²⁸ことが、彼女にとって一つの精神的区切りになったとも推察できる。

おわりに

1950年代初期、林海音が25年間住み慣れた北京を離れ、台湾で新たなスタートをきろうとしていた時期、その文中の日本に関する描写には、最愛の父や叔父を奪った仇への憎悪とともに、故郷台湾を植民地として苦しめた国への非難と反感が、はっきりと示されていた。1950年代は国民党政府がきわめて積極的に国語の普及を推進

し、脱日本化を課題としていた時期でもあり、こうした背景のもと、台湾を故郷に持つ林海音にとって、大切な故郷——長いこと北京で想像し思い焦がれていた場所であった——が日本からどのような仕打ちを受けてきたかを台湾人として読者に伝えること、それは他の外省人作家に比べて、より重要な意味を持っていた。

戦前の北京において林海音が感じていた余所者としての一種の疎外感は、光復した故郷へ戻った後、中国大陆で育った者の、反日感情に裏打ちされたある種の正当性と言語文化の優位性に基づいて完全に払拭された。そして自らの筆によって、故郷台湾の民俗や女性、家庭について語り、ひいてはそれが国語普及の一助となることに、林海音は強い充実感を感じていたのではないか。そこには台湾の人々の歴史認識とは異なる、外省人としての歴史認識が看取できる。中国大陆にいた大陸人あるいは台湾人にとって、日本は祖国を侵略した敵国であり、その支配下に貶められていた台湾の人々は、必ずや本来の姿を取り戻さねばならなかった。一方台湾にいた台湾人にとって、日本はついこの間まで宗主国であり、日本人として戦争で戦う決意をした者も多かったという。林海音の歴史認識は前者に他ならない。だが、その認識をさらに複雑なものにした要素として、彼女の台湾人としての意識があった。1949年前後、国民党政権の台湾撤退に伴いおよそ200万人の人々が台湾へ渡ったと言われ、林もそのうちの一人であったが、その認識は他の外省人たちと異なっていた。大陸から渡ってきた人々にとって、台湾は一時的な避難場所ではなかったが、林海音にとっての台湾とは、長い間思い焦がれていた故郷であり、「逃げてきたのではなく自ら決断して帰ってきた」場所であった。

1965年、林海音は40年ぶりに生誕地の日本を訪れ、それを綴った文章には、現地の人々との触れ合いが描かれ、懐かしさと親しみがこめられていた。そこには自分の生誕地を訪問できた満足感も見られる。また1980年代には、まだ幼い日、何の疑問もなく日常的に日本式の生活に親しんでいた一家の様子が描かれ、一家を支えようと若手記者として奮闘していた時期、同じように苦勞して成功した日本の女性作家を取材したことなど、日本に関わることがが大切な思い出の一つとして描かれ始めた。

林海音にとって、台湾における自らのアイデンティティをより一層明確にするために、その文中における日本の描写は、特に1950年代頃において一定の機能を有していたと思われる。それは台湾に対する描写と同様に、林海音の故郷再構築において重要な意味を持っていた。故郷の台湾で文壇の牽引役として自分の信念に従い、文学を通して自分を表現し、多くの人とかかわっていくことで、林海音は故郷の再構築を果たし、正当な台湾人としての自己の存在確立を成就させた。北京と台湾は、林にとって生涯離れられない「兩地」であり、そして日本への描写のなかには、その二つの地への思いと絡まり合う、複雑な視点を垣間見ることができるのである。

【注】

- 1 林煥文、1888年生まれ、七代前に広東省蕉嶺から台湾の頭份へ移民した知識人家庭の出身で、日本統治下における台湾の最高学府台湾総督府国語（日語）学校師範部卒。作家呉濁流は公学校教師時代の教え子であった。
- 2 日本統治時代の台湾人を対象とした初等教育機関。道徳教育と日本精神を涵養する国語教育を主とした。日本総督府は1895年に国語伝習所を台湾の主要都市に設置、1898年に「台湾公学校令」を発令し、伝習所に代わる教育機関として公学校が設置された。
- 3 『城南旧事』（光啓出版社、1960年7月）は、1920年代の北京城南を舞台に少女英子の目で語られる物語である。「惠安館」「我們看海去」「蘭姨娘」「驢打滾兒」「爸爸的花兒落了」という五つのエピソードで構成され、狂女と呼ばれる秀貞と薄幸の少女妞儿、コソ泥の青年、妾の蘭さん、乳母の宋媽といった人々との出会いと別れが描かれ、最後に父の病死によって少女時代が終わる。1992年に中英対訳版が齊邦媛・殷張蘭熙により香港中文大学から出版、日本では1997年、杉野元子による日本語版が新潮社から出版。同年ドイツ語版も出版、二年後にスイス「ブルーコブラ賞」受賞。
- 4 この小説は現在に至るまで中国各地の出版社から何度も出版されており、今でも大型書店に必ず並んでいるほど根強い人気がある。過激な描写がなく、古き良き北京を背景にそこで暮らす人々との出会いと別れが、少女の目を通して淡々と描かれるこの小説は絵本版も出版され、現在は小学校の推薦図書にもなっている。
- 5 杉野元子「林海音『城南旧事』雑考—映画との比較の視点から—」（《藝文研究》慶應義塾大学藝文学会No.70、1996年6月P39-59）、應鳳凰「林海音著『城南旧事』—その小説と映画化された作品との比較」『中国現代文学—台湾からみる中国大陆の文学現象—』小山三郎・許菁娟編著 晃洋書房、2010年、P23-45）。
- 6 著名なエッセイスト。本名夏承楹。1911年北京生まれ、北平師範大学（現北京師範大学）外国語文学系卒。成舍我的『世界日報』『学生生活』版主編を務め、1939年職場の同僚であった林海音と結婚。遷台後は国語日報社に入社、「台湾省国語推行委員会」の委員、『文星』

- 雑誌主編、『聯合報』主筆、『國語日報』社長および発行人を歴任。『聯合報』副刊のコラム「玻璃塾上」は1953年～1984年まで31年間続けた。
- 7 林海音は1948年11月に母愛珍、夫の夏承楹、三人の子どもたちと弟の燕生、妹燕玢とともに台湾へ渡り、翌1949年初めから新聞に散文、小説の投稿を開始した。同年5月から『國語日報』の編集、同12月～1955年10月まで『國語日報』「週末」版の主編、1957年～1961年まで『文星』雑誌の編集、1953年～1963年まで『聯合報』副刊の主編を歴任。さらに1968年～1995年まで『純文学出版社』の社長として出版人としても精力的に活動した。
- 8 王鈺婷「報道者の『中介』位置——談五〇年代林海音書写台湾之發言策略」P139、『台湾文学学報』第17期、2010年12月。“半山”とは日本の統治時代に大陸へ行き、二次大戦後に中華民国政府とともに台湾へ戻ってきた台湾人を指す。台湾人はもともと中国大陆を“唐山”、大陸の人間を“唐山人”や“阿山”などと呼び、半分大陸人という意味で大陸帰りの台湾人を“半山”と呼んだ。
- 9 夏祖麗『從城南走来：林海音伝』（天下遠見出版公司 2000）P 131。
- 10 天神裕子「林海音の『兩地』」、『お茶の水女子大学中国文学学会報』第31号、73-88頁、2012年4月。本論文では、散文集『兩地』（1966年、三民出版社）に収載された23編の北京に関する散文と、35編の台湾に関する散文について紹介し、それらの文章に台湾を故郷に持つ者としての林海音の重層的な立ち位置が現れていることを指摘した。
- 11 林海音『兩地』、序、1966年、三民出版社
- 12 『中央日報』は中国国民党の機関紙。1928年に上海で創刊。1949年、国民党政府とともに台湾に拠点を移して発行を続けた。2006年以降ウェブ版に移行。
- 13 『國語日報』は国語推進、教育普及を主旨とした専門紙。前身は1947年北平で発行された『國語小報』。1948年10月25日の台湾光復節に台湾で創刊。漢字に全て中印字母が付されている。
- 14 （初出）とあるものは1と7以外は実際の掲載記事を確認したもの。1の掲載メディアについては施英美《〈聯合報〉副刊時期（1953-1963）の林海音研究》（臺中：靜宜大學中國文學碩士論文、2003.6）の林海音文学年表（1918.4-2002.11）を参照した。本年表は林海音の発表作品について掲載紙を特定できない場合を除きほぼ網羅しているが、11以降は記載されていない。11～16は主に林海音全集に収載されており、文末に初出年が記してあった。15に対しては記載がなかったが、文中から日本訪問の翌年の1995年に書かれたものと思われる。また7については上述の年表で1964年『台湾文芸』第一巻第一期に掲載と記されているが、本文の後期において作者自身が1951年3月に書いたと記載しているため、この日付によって分析した。
- 15 夏祖麗『林海音伝』によれば、当時北京の台湾人は40～50人ほどで、みな台湾を脱出し祖国に活路を見出そうとした人々であった。かれらは日本当局の目を逃れ、また地元の人に奇異な目で見られぬよう、台湾人であることを憚って生活し、独自のコミュニティを築いていた。
- 16 「英子的郷恋」後期『写在風中』（遊目族文化出版 2000）P150。
- 17 「英子的郷恋」後期『写在風中』（遊目族文化出版 2000）P150。
- 18 『英子的郷恋』（浙江文芸出版社 1997）、『英子的郷恋』（九歌出版 2003）など。
- 19 1947年2月28日、台湾省専売局台北分局の取締官が關タバコを販売していた女性を暴力で取り押さえ、それに反発した市民に取締官が発砲、死亡者が出たことから抗議する民衆が省専売局台北分局に押し入った。行政長官公所前でデモに及んだ群衆に憲兵が発砲し数十人が死傷、この騒乱は台北全市に広がり、外省人（戦後大陸から台湾へ渡ってきた人々）と本省人（光復以前から台湾に住んでいた人々。おもに広東省、福建省から渡台）の対立として激化した。最終的に政府当局は民衆を武力で鎮圧し、多数の人々がいわれなき罪で処刑された重大事件となった。
- 20 二・二八事件以降国民党政府によって行われた恐怖政治。政府当局は共産党スパイの消滅を名目に、1949年6月21日に「懲治反乱条例」と「肅清匪諜条例」を施行し、あいまいな基準で民衆を次々に摘発、処刑、投獄した。二・二八事件発生時に発令された戒厳令は1987年まで40年間続き、この間多数の知識人や将来ある学生らが弾圧され、処刑された。
- 21 皇民化運動は日中戦争時期に戦争動員の一環として行われ、1937～1945年まで続いた。
- 22 国語家庭とは日本語の学習と使用を奨励する制度であり、全員が日本語を話す家庭であれば、国語家庭調査委員会に“国語家庭”として申請し、審査を通れば子女の進学や就職にもさまざまな優遇措置がつけられ、栄誉とされた。
- 23 国民政府は1946年、「台湾省国語推進委員会」を正式に成立し、各縣市に国語推進所を設けて北京語の普及運動を積極的に推進した。さらに1951年にはすべての教育機関において北京語の教育を徹底し、方言の使用を禁止した。
- 24 1950年代4月、中華文芸賞金委員会が成立し、優良作品には賞金を授与するとともに『文芸創作』月刊を発行、優遇された原稿料で作品を募った。同年5月には中国文芸協会が成立し、1950年代を通して官の文芸団体として文壇を牛耳った。同協会は1953年に中国青年創作協会を、1955年に台湾省婦人創作協会を創設し、さらに1955年、戦闘の時代と戦闘の任務の要求に適合した「戦闘文学」を提唱し、一貫して“反ソ反共”の文芸路線を推進した。
- 25 葉石濤著、中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』（研文出版 2000）。
- 26 葉石濤著、中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』（研文出版 2000）P102。葉によれば当時文壇に誕生した女性作家には潘人木、蘇雪林、謝冰瑩、林海音、郭良蕙、童真、張秀亞、張漱菡、繁露、敵友梅、劉枋、艾雯、孟瑤などがある。
- 27 1950年7月8日の『國語日報』週末版には「丈夫の回国」と題し、照井須恵子著『主婦之友』4月号掲載の文章が翻訳掲載されている。

- 28 夏祖麗によれば、1963年4月23日、『聯合報』副刊に掲載された一篇の詩「故事」が、総統を愚弄したとして当局から嫌疑をかけられ、林海音はその知らせを聞くと直ちに辞職した。「従前有一個愚昧的船長，因為他的無知以致迷航海上」で始まるその「故事」という詩は、一人の船長が小島に降り立ち、島の美女に魅せられて引き返せなくなったという内容であり、風運という人物が投稿してきたものであった。夏祖麗『從城南走来：林海音伝』（天下遠見出版公司 2000）P182。